



MEISEI UNIVERSITY

ジンシャ
エール2025.Oct
Vol. 36

JiN-SHA YELL

明星大学 人文学部人間社会学科
ニュースレター

DEPARTMENT OF SOCIOLOGY AND HUMAN WELFARE

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わるすべての人にエール(声援)を送ります!



聖蹟桜ヶ丘京王 SC の
屋上にてホップを栽培



フィールドワーク実習

社会調査実習(フィールドワーク実習)鶴沢クラスの授業では「コミュニティビジネスの現状と展望」について調査を行っています。鶴沢クラスではこれまで様々なコミュニティビジネスを対象としてきましたが、昨年度から武蔵境を中心に幅広く事業を行っている株式会社スィベルアンドノット、京王ショッピングセンター、多摩大学、工学院大学(敬称略)と協働でクラフトビールづくりや販売を行っています。この取り組みを通じて、クラフトビールや地域活性化について学び、各自さらに問いを立てて調査を実施、最終報告書を仕上げる予定です。実際に体験したクラフトビールの製造では、ホップの栽培や、ビールの材料・

商品名決め、商品ラベルのデザイン制作、ビールの醸造とすべての工程に関わらせていただきました。

完成したビール『多摩の明星』はせいせきショッピングセンター屋上にて4月24日から27日で行われた「せいせき春のビールまつり」にて、実際に販売を行いました。来場者の方々とコミュニケーションを取りながら、見事完売。多くのブルワリーが参加している中、「一番投票されたで賞」をいただくことができました。秋のビールまつりに向け、一丸となって張り切っています! (3年 小原瑞穂)

ホップづくりを糧に、思い描くなりたい自分へ



せいせき春のビールまつりで
「多摩の明星」販売

私は鶴沢先生の社会調査実習に参加し、ホップづくりを通して多くのことを経験し、学ぶことができました。実習では、体験を通じて、社会人として働くとは何か、社会で求められる力は何か、そして地域活性化がどのように進められているのかを実感をともなって学ぶことができました。これらの経験は就職活動にも大きな助けとなりました。

もともと私は地域活性化に携わる企業に就職したいと考えており、エントリーシートや履歴書の「学チカ」に実習で身に付けた力を記したところ、面接官の方から大きな関心を寄せていただきました。特に、一般的な学生生活

4年 大嶋 優海



では得難い実践的な経験を通じて、地域活性化のあり方を深く学んでいる点を高く評価していただきました。

さらに、この実習で得た学びは、「学チカ」の素材にとどまらず、自らの体験に裏打ちされた自信ある力となり、自分の強みを伝える際の確かな裏付けとなりました。その結果、第一志望の企業から内定をいただくことができました。

そして、鶴沢先生からは実習の枠を越えて様々な形でご指導を賜り、親身でありながらも学生に主体性を促すご指導から多くを学ばせていただきました。この場をお借りし、心より感謝申し上げます。

初年次
教育

交流会の様子

初年次教育とSA経験

人間社会学科では、初年次にレポート作成やプレゼンテーションの方法を学び、大学生活に慣れるために学内散策や交流会なども行います。4月には図書館や学生相談室など学生生活に必要な場所を確認する学内散策ツアーを行いました。7月に行われた交流会では、グループに分かれ条件を満たすようにワークに取り組み、親睦を深めました。そこで活躍するのが2年生以上のSA(Student Assistant)さんです。交流会の企画や運営をはじめ、授業で1年生をサポートするという経験もまた、良い学びの機会になっているようです。(花形)

SA経験を通して

SAとして後輩の学習を支援する中で、教える難しさややりがいを実感しました。相手に分かりやすく伝える工夫を重ね、自らの理解も深まった貴重な経験です。

最初は説明がうまくできず戸惑うこともありましたが、1年生の時に先輩に教わったことを思い出し、わかりやすい言葉を工夫して伝えるようにしました。相手の様子を見て自分から声をかけることを意識した結果、感謝の言葉をもらったことで、受け身ではなく自分から動く大切さを実感しました。SAを通して一人ひとりへの対応や先生方の授業運営の大変さを知ることができました。

2年

望月 真帆



交流会を企画・運営してくれたSAさん(荒井ゼミ)

2年

岩下 寛



辺野古集落を散策

Kuma
moto
熊本ゼミ現地で得た学びを
高校生に伝える

熊本ゼミでは地域社会の現状と課題について学んでいます。今回は5月にゼミで行ってきた沖縄フィールドワークと、それを基に明星高校でおこなったワークショップについて紹介します。

フィールドワークでは米軍基地の周辺を散策したり、米軍普天間基地の移設先である辺野古地区を訪れたりしました。中でも特に印象に残っているのは、辺野古の区長さんが「基地建設に反対するだけでは何も変わらず、ただ工事が目の前で進んでいくだけだった。だから条件をつけて受け入れるしかなかった」とおっしゃっていたことです。直接お話を聞いたことで、基地問題の複雑さを身近に感じることができました。

この経験をもとに、明星高校では、基地問題を自分事として考えてもらえるようなワークショップを行いました。「東京に沖縄の基地を移設することになった」という架空の設定のもと、都民や沖縄県民の立場になって議論するというものです。生徒からは「ただ楽しくてきれいな沖縄ではなく、もっと知ること自分たちにもできることがあることがわかった」などの感想をもらいました。私たちにとっても、教える立場になることを前提に沖縄と向かい合うことで、深い学びを得ることができた活動になりました。

3年

天谷里穂
柳沢未来

ワークショップの様子

Arai
荒井ゼミ

宇都宮酒造でのご講義

地域の現場から学ぶ
荒井ゼミフィールドワーク

栃木県塩谷町の廃校を活用した宿泊施設「星ふる学校くまの木」で、1月27日から29日まで合宿を行いました。同施設は、1874年に開校し1999年に閉校した熊ノ木小学校の校舎を再利用したものです。校内には、ガラスが貴重だった時代に盗難防止の印が刻まれた窓ガラスや、昭和初期の晴れ着姿の卒業アルバムなど、小学校と地域の歩みを物語る資料が残されています。私たちは教室を改装した宿泊棟に滞在し、炭酸まんじゅうづくりやキャンプファイヤー、流れ星の観測を通じて、地域の自然と文化の温かさに触れました。そして、小学校が、地域の人々を結びつける拠点として重要な役割を担い、今でも形を変えながら息づいていることも学びました。

一方で、塩谷町は指定廃棄物最終処分場の詳細調査候補地でもあります。豊かな水源となる候補地の尚仁沢をフィールドワークし、名水百選に選ばれる水と地元食材を生かした美味しい食事をいただきつつ、同計画の見直しを求める住民の方々の働きかけの足跡も見学しました。対策班長を務めた町役場の方からは、国・県・町・住民の関係性や、住民と連携した対応の経緯、行政の取り組みについて丁寧にご説明いただき、地域を守る「町民ファースト」の姿勢に触れて、社会の問題を地域の視点から考える意義を実感しました。

最終日は宇都宮酒造を見学させていただき、日本酒づくりの伝統を受け継ぎつつ、地元の水を生かして世界に高く評価されるお酒を新たに生み出す現場の方々の真摯さと情熱に触れ、私たち自身のキャリアを見つめ直す契機となりました。

今回の合宿は、多くの方たちの温かなご支援により実現しました。心より感謝申し上げます。いただいた学びを胸に、我々の今後の人生に活かしてまいります。

4年

江口宗一郎

尚仁沢にて
フィールドワーク

廃校舎を活用した宿泊施設

道路づくりを手伝うわたしたち

人びとの温かみと豊かな繋がり ——スリランカの村を訪ねて

8月7日～21日までスリランカの村に行き、ホームステイをし、現地のひとと道路作りに汗を流しました。現地の人はすれ違った時に毎回「アユボワン」と挨拶を交わします。おいしい、疲れた、暑いなど簡単なシンハラ語は自然と覚え、簡単な英語の単語とジェスチャーを交えて話しました。気持ちがあれば大抵の事は伝わります。パイロット、IT関係、看護師、学校の先生など、私たちと同じように素敵な夢も語り合いました。

ホームステイ先で、ダンスパーティーをし、伝統舞踊も披露してもらいました。日本の曲も流してくれたので、星野源の恋などを披露しました。日本から折り紙を持ってきて、千羽鶴や手裏剣を折って子どもとも遊びました。物が揃っているわけではありませんが、ココナッツの殻を使った鬼ごっこなど、子どもたちはその辺にある物を使い遊んでいました。

お風呂は川から流れてくる冷水を浴びたり、魚が泳いでいる川に浸かったりもします。トイレも外にあり、ペーパーは無く、バケツに水を汲んで左手でバシャバシャします。洗濯は手洗いです。たまに停電もありましたが、困ったことは特になかったです。星空が綺麗でプラネタリウムみたいでした。ただ夜は「ゾウが出ると危ない」と言われ、夜トイレに行くことはできませんでした。

日本から突然来た私たちを家族のように受け入れてくれました。誕生会にも参加しました。食中毒になって病院で点滴を打ってもらったときは、ホームステイ先の「お母さん」が、夜から朝まで付きっきりで面倒を見てくれました。困ったことがあったらすぐに気にかけてくれました。足りないものがあたら近所の家に借りに行ったりしていました。

毎日家には訪問する人が絶えず、近所の子やおじいちゃん、隣に住んでいる人などいろいろな人がやってきます。スリランカの村には、人々の温かみと繋がりが豊かにありました。「お金があるから幸せ」ではないとスリランカの村で学びました。

2年
新村千世
伊藤来夢



現地のひととのティータイム 紅茶はよく飲んだ
左から3番目：伊藤来夢、一番右：新村千世



誕生日会 小さなケーキを切り、
参加者全員に一口ずつ食べさせる

Takemine
竹峰ゼミ

被爆樹木と出合っ

「被害を受けたのは人だけではなく、被爆樹木の存在が、人々に勇気をもたらした」。被爆樹木は、実際に命が傷つけられていることを伝えていくことができる。ゼミ活動の成果を活かして、2025年7月明星高校で授業をおこない、寄せられた感想です。「話し合いが多く、班の人と意見の共有ができて良かった」との声も寄せられました。

爆心地から1.8キロで
被爆した桜の木 広島市



被爆樹木のことを伝えたいと思うようになったのは、昨年8月ゼミの広島フィールドワークがきっかけでした。被爆樹木を見たり、被爆者の思いを聞いたりしながら、「被爆アオギリのねがいを広める会」の清水正人さんとも出会いました。「戦争を体験していない私たちができることは後世に伝えること」という言葉を清水さんからもらいました。昨年10月には、被爆樹木の命をつなぐ、樹木医の方と長崎を巡る機会ももてました。

昨年9月には日野市役所近くの公園に被爆樹木二世の苗木を植樹する式に参加し、日野市の平和と人権課と協力して、被爆樹木をテーマに日野市の小中学生の前で発表をしました。調べてきたことをまとめ、今年に入り日野市民向けに展示会を開いたりもしました。

「被爆者の方から直接話を聞くことのできる最後の世代」とも言われます。被爆者の方や、被爆樹木のことなど広める活動に取り組んでいる方に話を聞き、「繋いでいく」取り組みをしながら、卒業論文にもつなげていければと考えています。

高校生に
被爆樹木を語る



被爆者にとって被爆樹木とは？
質問する 藤崎さん

3年
藤崎直音

Amano
天野先生

立川駅周辺で位置情報共有アプリの実証実験を実施

2025年5月、人文学部人間社会学科の天野徹教授と同学科の有志学生が、立川市の民生委員およびNPO法人立川災害ボランティアネットの有志の方の参加を得て、災害発生時に被災者の位置情報を共有するアプリの実証実験を行いました。

この実験では、天野教授がiOSを用いて開発した位置情報共有アプリを活用し、学生たちが実際にアプリを操作しながら、被災者として災害発生時の滞在地の位置情報および、避難先の一時避難所の位置情報を発信し共有するシミュレーションを実施しました。共有された情報は、登録者の位置情報をマップ上に表示する機能を備えたアプリで一覧することができ、表示を拡大・縮小することで詳しい位置情報が確認できるので、これを用いて被災者や要支援者の所在を把握し、迅速で効率的な被災者支援に役立てることができそうです。

実験の結果、このアプリは十分に実用可能であることが確認されました。学生たちからは、操作のしやすさや情報共有のしやすさが高く評価されました。また、実験に参加した民生委員の方からは、平常時における応用についての提案がありました。

参加した学生からは、「実際に地域の課題に触れることで、学びが現実とつながった」「自分たちの行動が誰かの命を守ることにつながると実感した」といった声が寄せられました。

今後も、アプリの改良を重ねながら、市民団体や行政での活用を目指し、学生の協力を得て社会実装に向けた活動を継続していく予定です。「自分の地域でも、社会実験を行いたい」ということがございましたら、ぜひお声がけください。



共有された
位置情報は
地図上に赤字で
表示される

新任教員紹介

Introduction of New Faculty Member



この春より本学で、映像制作を通して社会課題を表現する「ドキュメンタリー実習」や、地域に出て調査を行う「フィールドワーク実習」を担当しています。

これまで高校の社会科教員、NHKディレクター、アニメーション教材制作などを経験してきました。

私たちの社会はとても複雑で、目に見えるものはほんの一部にすぎません。その背後には文化的な背景や制度、構造が幾重にも絡み合っています。「何かもやもやする」「なぜだろう?」—そうした違和感の中には、「暴力」と言い換えられるものが潜んでいるかもしれません。私の研究テーマは、その暴力を発見し、平和に転換する力や仕組みを探ることです。

自分や他者との対話を通じて問題を見だし、よりよい社会のあり方を探究する—その学びの道のりを、皆さんと共に歩んでいきたいと思っています。

高部 優子 たかべ ゆうこ

東京都日野市出身。学術博士(横浜国立大学大学院)。専門は映像社会学、紛争解決コミュニケーション。



今年4月に着任しました、助教の杉山怜美と申します。

研究テーマは「ライフコースと趣味実践の関係」で、オタク文化やファン文化を対象にしています。オタクやファンは「好きなこと」に没頭していると思われがちですが、実際には勉強・仕事・家事など多様な役割と向き合いながら趣味を続けています。私は、そうした「好き」を続けることが可能になる背景を、インタビューやアンケートを通じて探っています。

講義では文化やメディアなど「好き」と関わる事象を扱い、社会学的な視点で身近なものの新たな一面に気づく面白さを伝えたいと思います。皆さんの「好き」から、一緒に社会学を始めましょう。

杉山 怜美 すぎやま さとみ

神奈川県藤沢市出身。社会学博士(慶應義塾大学大学院)。専門は文化社会学、メディア研究。

2025年6月、天野徹教授が本学科で行ってきた教育実践「文理融合・人文社会科学総合」の「21

世界の研究や技術開発の軸足は「持続可能性」と強靱性・国民の安全と安心の確保」に加えて、「一人一人が多様な幸せを実現できる社会に移りつつあります。内閣府は、「あらゆる分野の知見を総合的に活用して社会の諸課題への明確な対応を図ることが不可欠という考え方に基づき、①総合知活用の実践を行う事例、②総合知人材の育成を行う事例、③総合知の活用方法の進化を目指す事例という三つのカテゴリーでの募集を行っています。

これからの活動は①社会科学を総合して現代を理解、②リベラルアーツとセンスメイキング、③高度情報環境を活用したシステム・アプリの活用、④事例研究や実装実験を通してスキル等の習得を通して、「情報社会の社会経済現象を学際的な知見に基づいて捉える能力と、ビジネスモデルや情報システム



立川アプリ実証実験 TRONシンポジウム展示



「総合知」の習得を目的とした「総合社会科学としての情報社会学」による人材育成が、内閣府の公募している「総合知の実践事例」のうち、「総合知人材の育成を行う事例」のカテゴリーで採用されました。



メタバースを活用した授業風景

人財などを輩出した実績があり、今後の展開が期待されます。

天野教授の教育活動、内閣府「第三回総合知の活用事例」に採択

NEWS

参考・引用) https://www8.cao.go.jp/cstp/sogochi/jirei_3kai.html



人文学部人間社会学科事務室

東京都日野市程久保2-1-1 TEL.042-591-5111(代)



明星大学人文学部
人間社会学科HP